

へいそくおけえ

■曾於市の文化財散歩（六）

今に伝えるもの



恒吉、旧遠矢家の門

小さな町にも、大きな町にも私達の先人の残してくれた大切な文化遺産があります。火山灰に覆われた厳しい自然条件の鹿兒島という風土の中で、お地蔵様や田の神様をつくりだし、そこには祈りの文化が生まれました。

島津氏は、十二世紀の末、薩摩の国、大隅の国、やがて日向の国を統一し、約七〇〇年間守護大名、戦国大名、近世大名と一貫して南九州の地を統治し、近世薩摩藩の石高七十七万石は加賀前田氏（金沢藩）の一〇二万石に次ぐ天下第二の大藩でした。そこには麓という武士集落をつくり、

「城下土」に対して「郷土」という薩摩独特の外城（とじょう）制度を作り上げました。

本来の麓は軍事上、政治上の中心であって、郷土は主に麓に居住し（例外もある）武を練り、文を修め、兵農両様の訓練を受け、城山に接し、馬場をもち、交通の要地にあるのが原則でした。一六一五年の一国一城令によつて麓も移転新設等、城山を持たない麓も出現し、防衛的、軍事的な面も薄らいで政治交通経済的機能をより多く備える麓が出現しました。知覧や出水の武家屋敷は特に有名ですが、昔はどの町の麓にも立派な武家屋敷がありました。しかし近代化に伴って、いつの間にか姿を消してしまつたのです。道路も時代と共に変化し、昔はダシゴロや馬車が駆け抜けていた狭い道も徐々に拡張され、今日では区画整理やモータリゼーションの発達により各家庭の木戸口も一変していきましました。しかし、幸いにして時代の変化を受けない所も残っています。曾於南部の志布志市にはまだ多くの武家門、屋敷が残っており、庭園等も公開されています。

私達の曾於市の財部では龍虎城を中心に麓が形成され、末吉には末吉城、大隅には恒吉城、月野城を中心にそれぞれの麓が存在しました。写真のような個人宅の武家屋敷門も年々少なくなり財部に二ヶ所、末吉に一ヶ所、大隅に二ヶ所残っているだけです。貴重な建造物が姿を消していくのは極めて残念なことです。

市内の麓を散策する時、そこには当時積み上げられた石や軽石の苔むした石垣が残っていて、耳を澄ませば廃墟となつた木戸口から袴（かみしも）を着た人々の声が聞こえてくるようです。当時を偲ばせてくれる石垣や武家門もやがては消滅するかもしれません。それらを活字や写真でしか見られなくなるのも淋しい限りです。私達のまわりには驚きと感動を与えてくれる郷土の素晴らしい文化遺産があります。それらを自分の目で見て、肌で触れてみてはいかがでしょうか。

参考文献

『輝北探訪 歴史の散歩道』

（曾於市文化財保護審議会委員

上原 尚士）